

2026年4月12日 ルカ24：13-35

説教題 「目が開けイエスであることがわかった」

【今日の説教から】

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい」まさにこの御使いの言葉は私たちの人生の至言です。

『主は今生きておられる。』あの讃美歌が思い出されます。

「思い出しなさい」。

私たちは御言葉を安易に忘れ去ってしまいます。そして途方に暮れ、おろおろし、取り乱し、希望を失い、心配するのです。主はもう勝利しておられるのに。私たちにも勝利の主は共におられるのに。私たちは常に悲観的で、恐怖に閉じ込められて主の栄光を見ることが出来ないのです。

エマオの途上の二人の弟子たち。彼らもまた最近起こったことが摩訶不思議で到底理解できず、道々議論を尽くしてはため息をついていました。

「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけてい」たのに。

頼みの綱も取り去られ、いったいどうしたらいいのだろうと立ち尽くす二人。そしてそんな弱々しい弟子たちの行く道を共に歩いてくださる主。主は道々御言葉を説明して下さいました。

その「説明する」という語と、「目が開く」という語は同じ言葉が使われています。

「道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったとき、お互の心が内に燃えたではないか」私たちが開眼し希望に生きる道がここに 있습니다。

皆様おはようございます。

寒暖差のある日々、お元気にお過ごしでしたか。昼は20度、朝晩は0度というような日がありました。桜の花がきれいに咲き、花吹雪も見事でした。

先週はイースターでした。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。」という御使いの言葉が心に思い出されます。

御言葉を思い出すということが私たちが主の恵みの出来事に乗り遅れないために必要なことであることを先週の御言葉から学びました。私たち自身の常識や考えに捕らわれると、弟子たちが言ったように、せっかく怒っているすべての出来事を信じられず、主の復活の勝利

を、主の御業を愚かで空虚なナンセンスだと思ってしまう、そういう、すぐに神様のお言いつけを忘れて神様の元からはぐれて迷子になってしまう性質を私たちは持っています。

ここにもエマオという村に行こうとしている二人の弟子たちがいました。

24:13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、

24:14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。

24:15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

24:16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。

24:17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんの事なのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。

24:18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、

24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。

24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。

彼らの問題はなんであったかと言いましたら、彼らもまた起こっている素晴らしい出来事を受け入れることが出来なかったということです。

素晴らしいことが起こっているのにまたもその出来事に乗り遅れているのです。

思えば主が共におられない時の私たちの様子とは、そのようなものでした。考えても考えても分からない。論じても、探しても分からない。そして物事は自分の思うことよりも悪いところで進行している。孤立無援で状況は悪くなるばかり。最悪の状態を予想して、それが分かった時のために自己防衛をするも、現実には思っていた予想を上回る悲惨な状況…。そのようなことが起こったことはないでしょうか。捉えどころのない、定かならぬ人生。私たちはどのようにしてその人生を処していったらよいのでしょうか。

しかし弟子たちが遭遇していたのはそれとは全く違います。私たちのために主は勝利してくださったのです。主はそのような、孤立無援の苦悩から、罪と過ちと死の裁きと滅びと苦しみから、私たちを贖いだして救ってくださいました。主は常に私たちのことを守り、導き、育ててくださる恵み深いお方です。状況は、私たちが思うようには悪くなく、私たちが立ち尽くして悲しんだり、一歩も立ち行かないように状況ではなくて、主の復活の勝利の中に置

かれています。それなのに私たちはその恵みに乗り遅れていて、それを信じる事が出来ず、勝利の朝日が昇っているのに暗い顔をしたままなのです。

24:13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、

24:14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。

24:15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

24:16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。

24:17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。

24:18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、

24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。

24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。

わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていたのに……。彼らの悲しみや、理解できない辛さ、葛藤がしみじみと伝わってきます。

しかしそんな彼らは一人ではないことを心に刻みましょう。イエス様が、彼らがそうとも知らずに目が閉ざされいても、イエス様が失意の彼らと共に人生を歩いていてくださるのです。これは私たちが忘れてはならないことです。こういう聖書の箇所は忘れずにしかと心に留めておくべきです。

24:17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。

24:18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、

24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。

24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。

しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。

24:22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、

24:23 イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。

24:24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行ってみますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。

一つ一つの現実には起こっていることがあまりにも悲しく、あまりにも摩訶不思議で自分の理解を超えている。悲しみ立ち尽くす彼ら。イエス様はどう語られたのでしょうか。

24:25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。

24:26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。

24:27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。

イエス様は御言葉を解き明かされました。御言葉を説明なさいました。

御使いがこう言ったように。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。

24:6 そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。

私たちは立ち尽くすとき、神様の御言葉を思い出し、御言葉を味わい、御言葉を思うのです。私たちが議論しても何もらちが明かないことも、御言葉の内には答えがあるのです。

24:28 それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。

24:29 そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた。

24:30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、

24:31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなく

なった。

24:32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。

「彼らの目が開けて」。まさにこのギリシャ語の言葉は、32節にありました、「聖書を説き明してくださった」という言葉とまさしく同じ言葉なのです。主は今日も聖霊によって語り掛け、御言葉を解き明かし、私たちの心を照らし、熱く神様の愛によって心を燃やし、私たちの目を開いてくださいます。

私たちは人生を伴奏してくださるイエス様の恵みによって神様の御言葉の解き明かしにあずかり、いつも恵みに向かって、復活の勝利に向かって目を開かれ、黒雲を突き抜けて神様のお力に触れ、いつ魔喜びに満たされて手を賛美しながら進むことが出来るのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。私たちが聖書の言葉を忘れ、人生の迷いの道に入り、悲しみのうちに立ち止まっているとき、あなたはその道すがらを共に歩き、聖書を説明して下さり、私たちの目を開いてくださいますからありがとうございます。あらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン